無限と迷路と翡翠

柳之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限と迷路と翡翠

【Ｎコード】
Ｎ２２４２Ｒ

【作者名】
柳之助

【あらすじ】
無限書庫司書長、ユーノ・スクライア。
彼を取り巻く彼女たちの終わってばかりの続き続ける物語。
ユーノが主人公です。
ユーノ君好きに読んでいただけると幸いです。

episode：prologue

新暦七十七年。
六月十七日。
ミットチルダのとある教会。
そのとある部屋。
そこにいたのはタキシードの青年。
というか僕だ。
ハニーブロンドの長髪で眼鏡を掛けた顔はかなり女性的である。
自分で思って悲しくなってきた。
今年で二十二年の付き合いになる自分を見直す。
変なところはない……と思う。
鏡の前でうなっていると。

「おい、ユーノ。そろそろ時間だろう」

ドアから声をかけてきたのはクロノ・ハラオウン。
十二年来の親友だ。

「分かってる」

クロノに返事をして部屋を出る。
緊張してきた。
一生に一度……のはずの晴れ舞台だ。
会場に向かう。
その途中で。

「まぁ、落ち着け」
「落ちつけないよ……」

「慌てても失敗するだけだぞ」
「他人事だと思って……」
「他人事だからな」

前言撤回。
親友などで無い。
腐れ縁で十分だ。
クロノが僕より前に出て、会場への扉を開ける。

「行って来い」

クロノに送り出されて、会場に入る。
そこには数少ない僕の友人たちがいて、僕を祝福してくれている。
僕ことユーノ・スクライア。
本日、結婚します――。

扉からバージンロードを通って、彼女が歩いてくる。
その姿を見て回想してみる。
相手は無限書庫の司書である。
初めて会ったのは五年前だったか。
無限書庫司書長として最初は接していたけど、四年前に付き合いだした。
僕が熱愛告白したのだ。
嘘です。
彼女から告白されて、なんとなくＯＫした。
周りは僕がなのはやフェイト、はやてのうち誰かが好きだと思っていたらしいのでかなり驚かれた。
幼馴染なだけでそういう関係ではないのに。

その証拠に僕が結婚しようと思ったのは彼女である。
何故そう思ったかというと、これもなんとなくだ。
……いや、自分なりに考えたすえの決断だけど。
まぁ、とにかく。
このぼくはなのはやフェイトやはやてではなく。
彼女を好きになったのである。
彼女が僕の横に来て。
神父さんが結婚の祝詞を読み上げる。
そして。
誓いの言葉を聞かれ、

「誓い――」

ます。
とは言えなかった。
世界が。
世界がひっくり返る。
世界がシェイクされる。
天動驚地。
轟音と悲鳴。
破壊と振動が僕を襲う。
頭部に衝撃が来て、視界が暗転する。
なんじゃそりゃ。

意識が浮上する。
眼を開ける。
瓦礫の山が眼に映る。
教会が崩壊したのか。

体中が痛い。
周りを見て。
ふと、注視したのは。

「――――え？」

手。
瓦礫の山から。
突き出した手。
それは。
手だけだけれど、分かる。
彼女だ。

「――――――

その上空。
突如発生した地震により引き起こされた惨劇を見る者は
「――傑作ね」
「酷いことを言いますね」
いる。
金髪をポニーテールにした十代半ばの少女。
銀髪のシスターの同じく十代半ばの少女。
二人は円形の魔方陣の上に立ち、下界を見つめる。
「何も起こらなくておかしいとは思ったけど、まさかこんなどんでん返しがあるとはさすがに驚きよ」
「さしずめ打ち切りになった少年漫画のようですね」
下界の惨状が何でも無いかというように二人の会話は続く。
「やっぱり、あんなモブキャラじゃだめよ。ちゃんと主役級じゃないと」
「主役級……ですか」
「そう。……もういいわ。この世界は終りね」
「行きますか？」
「ええ」
魔方陣が輝く。
「何としても――」

二人を光が包み、

「――ユーノ・スクライアを幸せにして見せる」

消えた。

新暦七十七年。

ミットチルダで震度七越えの突如大地震が発生。

死者数万人の惨劇。

その中に。

ユーノ・スクライアの名前もあった。

episode：prologue（後書き）

なんとなく、衝動で投稿しました。
多重クロスの『流転の悪役』も連載中ですが、そっちをメインでこっちは月に一、二話投稿したいです。

ｅｐｉｓｏｄｅ：高町なのは？（前書き）

きみはどうして笑っていられるんだろう。
きみはどうして僕に笑いかけてくれるんだろう。
きみは僕のせいで人生を歪めてしまったのに。
それでも飛んでいるきみを見ていたいという、
ぼくはなんて罪深いのだろう。

ｅｐｉｓｏｄｅ：高町なのは？

時空管理局本局。
そこに無限書庫はある。
その名の通り、無限の情報が存在するそこは長い間使われていなかったが、十一年前にとある少年によってその機能は使われ出した。
現在では管理局の情報を担う無限の書庫。
そこの主の名をユーノ・スクライアという。

●

無限書庫。その司書長室に彼はいた。
長い金髪を緑のリボンでまとめている青年だ。
その翡翠の瞳は机に積まれた書類に向かっている。
黙々と作業を進める青年。
そこに、

「コーヒーが入りました」

湯気を昇らせるコーヒーが机に置かれた。
青年よりも長い腰まである漆黒の髪。紅い瞳の右下には泣きぼくろがあり、肉感的な体を持っている女性だ。
青年は彼女に、

「ああ、ありがとう。エスティカさん」

「仕事ですので。スクライア司書長」

青年――ユーノ・スクライアの礼に小さく笑みを浮かべる女性――エスティカ・クラウン。
ユーノは無限書庫司書長であり。
エスティカは副司書長だ。
コーヒーを渡したエスティカは部屋のソファに座り、携帯端末を見て、

「あら」

「ん？」

声をあげたエスティカ見る。
彼女は驚いた風に口に手を当てて、口元を歪め、

「いえいえ、発見されたらしいですよ」

「何が？」

「四人目の死体」

「……」

一か月半前。
それは起きた。
時空管理局のお偉いさんが殺されているのが発見された。
二週間後には二人目が発見され、先週には三人目も発見された。

「今回も三人目と同様に争った形跡があるみたいですねぇ。どちらも戦闘適正無いのに不思議ですね？」

「そうだね」

仕事の手は止まらない。
まるで関心が無いというように。
口元の歪みは消えない。
まるで面白くてたまらないというように。

「こういう人たちを殺人鬼って呼ぶんですかねぇ？私には理解できませんわ」

「そうだね」

コーヒーを一口。

「僕にもわからないよ」

●

「あれ？ユーノくん？」

「なのは？」

日替わり定食Kのカキフライを口に運んで、視線を上にあげた時。
本局の食堂。
あまりエンカウント率の高くない幼馴染がエンカウントした。

「ひさしぶりだね。半年ぶりくらい？」

「そうだね。ＪＳ事件の打ち上げ以来だからそんなものかな」
訂正。エンカウント率の低い幼馴染がエンカウントした。
なのはは日替わり定食Ｔのトマトスパゲティをお盆に載せたなのはがいた。
「ここ、いい？」
「いいよ」
ありがと、と言ってユーノの向かいの席に座る。
なのはが合掌したのを見計らって、
「珍しいね、きみが本局に居るなんて。一人かい？」
「うん」
パスタを結構大雑把にフォークに巻きつけて、口に運ぶなのは。
それを見て、ユーノもカキフライを運ぶ。
モグモグ。
サクサク。
「それでね」
「うん」
モグモグ。
サクサク。

「最近噂の事件私たち機動六課が当たることになったの」

「……」

モグモグ。

――――。

「……？ユーノくん？」

「いや、なんでまた？」

モグモグ。

サクサク。

音が再会した。

「ＪＳ事件から私たち結構暇だからね。管理局も空いている人材をほったらかしいにはしたくないんだろうね」

「ふうん。ま、六課は保有ランク異常に高いからね……」

隊長副隊長はオーバーＳにニアＳ。部隊長なんかはＳＳ－だ。

元新人の四人もすでにＡＡやＡだ。

モグモグ。

サクサク。

「それに今回の被害者は私はいろいろお世話になったからね」

「――――」

モグモグ。

――――。
再び音が途切れる。
「？」
「カキフライが無くなった」
米を食べだす。
「それで、きみが本局に来たのかい？」
モグモグ。
パクパク。
音が変わる。
「ううん、それは関係ないと思うよ。たまたま私が暇だっただけ」
「そっか」
「うん」
モグモグモグモグ。
パクパクパクパク。
合掌。
「ごちそうさま」
「ごちそうさま」
「まぁ、頑張って。なにか資料が必要なら無限書庫までどうぞ」

「うん、ありがと。ところでユーノくん」
「なに？」
なのはは空になった皿に目をやり、
「ここの食堂の日替わり定食なんでＡからＺまであるの？」
もう日替わり定食じゃないよね、と首をかしげるなのは。
「ああ、簡単だよ。ＡからＺまで日替わりで食べてねっていう事」
「なら、日替わりじゃなくて普通の定食でもいいんじゃない？」
「それは言わない約束なんだよ」
「そうなの？」
「そうなの」
ミルクティーを飲むなのは。
コーヒーを飲むユーノ。
「じゃあ、なのは悪いけどお先に」
「うん、またね。ユーノくん」
軽い挨拶をして席を立つ。
お盆を持って席を離れ数歩進んだところで振りかえり、

「ねぇ、なのは」

「ん？」

「きみは今――」

――――幸せ？

ｅｐｉｓｏｄｅ：高町なのは？（後書き）

だいぶお待たせしました。すいません。

基本会話メインです。

ｅｐｉｓｏｄｅ：高町なのは？

夜のクラナガン。
街の中心部から少し外れた豪邸があり、その正門。

「ねー、ティア。ほんとに来るのかなぁ？」

「さぁ？　知らないわよ、そんなの」

青髪の少女、スバル・ナカジマにオレンジ色の髪の少女、ティアナ・ランスターがいた。
また彼女達のすぐそばには、

「確か、一昨日に匿名で通報があったんですよね、次の被害者はこの家の人だって」

「怪しいですけど、他に手がかりが無いから私たちが警備に当たると……」

赤髪の少年エリオ・モンディアルに子竜を伴ったピンクの髪の少女、キャロ・ル・ルシエがいた。
この二カ月ほど世間を騒がせている管理局の上役の連続殺害事件。
それの捜査に当たることになった機動六課だったが、手づまりだった。
手がかりが無さすぎたのだ。
一ヶ月半に渡り四人が殺されたが共通点は管理局でそれなりの上役であったという事だけ。
――実際は彼女達の上司である隊長陣は共通点に気付いていた。

それを共通点であるとは気付いていなかったのだけれど。
そんな中、つい一昨日匿名の通報があり、次の被害者の予告があった。
あやしさ抜群ではあったものの、他に手がかりが無かった。
なにより被害者に指された本人の強い意向による。
「ま、結局はビビったお偉いさんのお守りってわけよ」
「ティア……またそんなズバッと……」
物怖じしないティアナに冷や汗を流すスバル。
「でも、ホントに来ますかね？」
「さぁね、ホントにここの人が狙われているかもわからないし」
今夜警備にあたったのは管理局の広報部の部長であるカーレス・マグワイア。
その前の被害者は教導隊の事務だったり、医局課や武装関係のお偉いさんだ。
関係は謎である。
「まぁ、それに来るとしても裏門のほうだろうし。いくらなんでもバカ正直に真正面から来ることはないでしょ」
そして、裏門には。
「隊長陣が勢ぞろい。八神部隊長まで出張ってるんだから仮に来ても問題ないわよ」

「そりゃ大変だ。バカ正直に真正面からきて正解だったよ」

「！？」

振りかえった先、全身を覆うマントで姿を隠した影に襲われた。

●

時をほんの少し遡り、

裏門に陣取る人影が五人。

「……」

「ヴィータ、いい加減機嫌を直せ」

「……別に不機嫌じゃねーですよ」

赤い少女、もとい幼女、鉄鎚の騎士ヴィータ。

紫の女性、剣の騎士、シグナム。

二人揃って雲の騎士ヴォルケンリッターの前衛二人であり、機動六課副隊長である。

「私はヴィータ副隊長の気持ちもわからなくは無いけど……」

「フェイト隊長までなにゆうとるん、仕事やで、仕事」

金の長髪の女性と茶の短髪の女性。

金色の閃光フェイト・T・ハラオウン。
夜天の王八神・はやて。
そして、
「そうだよ、二人とも。仕事はちゃんとしようね」
白い悪魔にしてエースオブエース高町・なのは。
「なのは……」
「仕事の鬼のフェイト隊長までそんなこと言うなんて珍しいね」
「だって、なのは……！」
「いいんだよ」
にっこりと笑うなのは。
それにフェイトもヴィータも何も言えなくなる。
「いいから、ね。ちゃんとお仕事しよう」
そうして。
「……え？」
足元に魔法陣が浮かんだ。
その場にいた五人を乗せて。
……翠の光……？
跳んだ。
物理的にではなく、空間転移だ。

視界が光で埋まり、見た先には。

「！？」

黒。

あたり一面の黒の一色だった。

それを確認したと同時に落下し、空中にいることを自覚する。

『Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ』

足元に桃色の翼が生まれた。

同時に浮遊する。

『大丈夫ですか、マスター？』

「う、うん。ありがと、レイジングハート」

『お気になさらず』

周りを見れば、他の四人も同じように空中に浮かんでいる。

ヴィータが周囲を見渡し、

「どこだ、ココ？」

『ミッドチルダ海上、先ほどの地点より百キロほど離れた所です』

「百キロって何でまたそんな所に……」

いや、原因は解っている。

先ほど足元に浮かんだ、

「長距離転移魔法陣……」
「かなりの使い手だな、この距離で私たちを同時に跳ばすなんて」
「おまけに通信もジャミングされとる」
「確か……魔力光は青だったね」
魔力光というものは存外重要だ。
魔力光の色は個人を特定するのに大いに役立つ、が。
「なに？　紫だったろう」
「はぁ？　何言ってんだよ、茶色だったぜ」
「ちょいまち、黒だったやろ」
「……？」
四人が首を傾げ、なのはに目を向ける。
「……翠に見えたけど……」
「どういうことだ？」
「魔力光ってのは個人特有の固有パターンやからそう簡単にいじれないやろうけど……」
「うーん」

五人で唸っていたら。

『マスター』

「ん？　何、レイジングハート？」

『先ほどの場所に戻らなくていいのですか？　三十分近く掛りますが』

「あ」

『マスター？』

●

「おお……！」

拳をぶち込む。

スバル・ナカジマが放つそれはフロントアタッカーという役目を

果たすために鍛え上げられた拳だ。
並みの障壁なら一瞬で破壊できる一撃だが、
「まだまだだね――バースト」
「！？」
フードで顔を隠した青年の紅色の障壁に塞がれる。
破壊どころかヒビ一つ、傷一つ付かずに塞がれる。
さらに青年のトリガーヴォイスと共に障壁が爆散する。
「スバル！」
爆煙の中からスバルの身体が飛び出し、地面を転がる。
気絶したらしく、見るからに体から力が抜ける。
「くっ……」
周囲にはすでにエリオもキャロもフリードも地に伏している。
青年が現れてから約二十分程。
戦闘に入ると同時にロングアーチから来た隊長陣がミッド海上に跳ばされたという悲鳴。
こっちが叫びたいわ、と思いながら青年と戦うが、四人がかりですでに三人潰された。
「強い……」
というより、やり難い。
攻撃パターンは僅か二つ。
打撃用の射出型チェーンバインド。

攻撃を障壁で受け止めてからのバリアバースト。
その二つでやられた。
前者は始めてみるし、後者に至っては知っているがあそこまで高威力なモノも始めてみた。
始めてばかりだ。
だが。
あと十分。
あと十分耐えなければならない。
そうすれば、

「悪いけど、彼女達が来る前に終わらせるよ」

青年が右手を前に突き出す。

「！」

「ストライクチェーン」

背後に白色の環状魔法陣が生まれる。
そして、銀色の鎖が放たれた。
迫るそれを側転で回避。避けた所で、愛銃クロスミラージュをモード2に移行。
銃口から刃が生まれる。
それをチェーンに向かって振る、が。
がつん！
鈍い音と共に弾かれる。

「硬っ……！」

弾かれ、姿勢が崩れた瞬間に、

「はい、終わり」

「！？」

チェーンが曲がった。
曲がり、ティアナに巻きつく。

「迎撃に出たのは失敗だったね」

反応は良かったけど、不合格。
青年はそう、呟く。
そして、さらなるトリガーヴォイスを紡ごうとした瞬間。

「！」

即座にバインドを排除し、自分の真横に障壁を展開した。
そして――――――来た。
真っ白な光の束。
砲撃だ。

●

「う、うおおおおおおお！」

始めて青年の口から苦悶の声が吐き出される。
右手で錆色の障壁を維持させる。
永遠にも等しい一秒。
それに続く二秒、三秒。
まだ、止まらない。
青年は頭の隅で思考する。
これは、この白い魔力光は八神はやての長距離砲撃だと。

「早すぎるだろっ……！」

まだ二十分程度しか経ってないのに。
――――唐突に砲撃は止まった。
徐々に勢いが弱まるわけではなく、本当に突然。
まるで。
まるで、自分で砲撃を止めたように。
止まった次の瞬間だった。
終わらない次が来た。
視界を覆ったのは金と赤紫。
同時だった。

「炎雷――」

「――十文字！」

金色の閃光、フェイト・T・ハラオウンと剣の騎士シグナムのコンビネーション。
高速飛行の加速を余すことなく乗せた炎と雷の十字の双閃。
戦斧と剣が障壁に叩き込まれる。

「――――！」

先の砲撃ですでにボロボロだった障壁は一瞬で破砕する。
青年が衝撃により血の塊を吐き出す。
それでもまだ動けた。
そしてまた次が来た。

「どりゃあああああああああ！」

叫びと共に来たのは巨大な戦鎚を振りかぶった紅い少女。
鉄槌の騎士ヴィータ。
彼女を確認し、青年はとっさに左手で障壁を展開。
ノータイムで展開されたが、それでも十分な強度を誇る。
その証拠に振り下ろされた鉄鎚にも耐え、

「ぶ、ち、抜けぇぇぇぇぇ！」

一瞬でぶち抜かれた。
左手が嫌な音を立てる。
だが、そんなモノに構っていられなかった。
なぜなら、障壁を破壊した紅の鉄騎が青年の正面から外れて、見えたその後ろ。
それを認識した瞬間無理矢理両手を動かす。
展開されたのはやはり障壁。翠色だった。
直後にそれが来た。

それは桃色の光を撒き散らしながら黄金の槍の穂先を障壁に突きたてる白い魔導師。
エースオブエース、高町なのは。
愛杖レイジングハートを突きたて、
「ブレイク……！」
「……！？」
正気か、と青年は思った。
周囲にはティアナ・ランスターたち四人が転がっているはずだったから。
しかし。
視界の隅に見た。
否、誰もいなかった。
……さっきの三人が回収したのか！
納得した瞬間。
「シュートーーーー！」
翠を砕き、桃色の極光が青年を飲み込んだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ：高町なのは？（後書き）

超絶久しぶりですがＧＯＤでなのは熱が再燃。

続きは近いうちに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2242r/

無限と迷路と翡翠

2012年1月7日00時52分発行